

## 二十歳の誓い

私は双子という存在に生まれました。双子を授かったことを、宝くじに当たったようだと語ってくれる両親の下、同じだけの愛を受けて育ったはずでした。しかし、幼い私はそれを素直に受け入れることができませんでした。周りから聞こえてくる声は、「できる兄と地味な弟」。双子であるがゆえ、身長や体格という些細なものから学力や運動能力といったものまで、周りから勝手な比較をされました。それが悪気のないものだとわかっているからこそ押しこらえた不快感と、頑張っても一向に出すことの出来ない結果に打ちのめされ、次第に自分の価値を見失っていきました。身近な存在と比べられ、競争を強いられることの残酷さを肌で感じてきたせいから、私は「ライバル」という言葉が大嫌いでした。

そんな私のトラウマとも言うべき意識を変えたのは、二人の存在でした。その一人は、これまで比較され続けてきた双子の兄です。ある日、彼の部屋に入ったとき、思わず掛ける言葉を失いました。大学受験に向け、机に向かってひたむきに勉強する兄の後姿は、自分が勉強でも何にしても中途半端で怠慢だったことに気づかせてくれました。劣等感ゆえに競争にとらわれていたのは私自身でした。兄のことを尊敬の目で見られた時、初めて「自己嫌悪」という世界から抜け出ることが出来たのです。

もう一人は、ある美容師さんでした。お洒落の仕方がわからなかった私は、高校の時、思い切って美容室に行きました。自分の思いをたどたどしく伝え、一抹の不安を感じつつもお任せしました。しばらくして出来上がったヘアスタイルを見た瞬間、まるで違う世界に足を踏み入れたかのような感覚をいただきました。髪型がこんなにも気分に影響し、自信までもてるようになるのだと驚きました。その時の感動が自分の心を突き動かし、高校卒業後は美容師の専門学校に通おうと決心したのです。

あれから2年、私はこの4月から京都のヘアサロンで働き始めます。学校やバイト先の先輩が教えてくださった「出来ないことがあれば、皆で助けあったらいい。うまくできない人がいたら、その人の思いをじっくりと聴いてあげなさい。」というやさしい言葉が身にしみました。落ちこぼれてしまう人を、だらしのない、努力が足りないとは突き放すのではなく、一緒に頑張ろうと手を差し伸べる。私は素晴らしい先輩に恵まれたと思いますし、自分自身も、そんな尊敬できる先輩のようになりたいと強く思います。

勝手な思いこみの世界から飛び出してみると、目の前の世界が大きく広がりました。ライバルといった競争に苦手意識はありますが、兄や先輩方の存在は、「尊敬」「憧れ」という形で私に大きな向上心を与えてくれました。両親にはこれまでたくさんの心配や苦勞をかけてきましたが、これからの私を見ていて欲しいと思います。これからは私たちの世代が学び育んできた「生きる力」を忘れず、努力を惜しまず、自分の道を切り拓いていくことを二十歳の誓いとさせていただきます。

平成27年1月12日 新成人代表 岡田 脩平